

持続可能な取組に関する表彰 (開催後報告書概要版抜粋)

2026年2月6日 第14回持続可能な調達ワーキンググループ

公益社団法人
2025年日本国際博覧会協会
持続可能性局



大阪・関西万博を通じて実施された、持続可能性に関する先進的な取組について、参加者のさらなる取組を促すとともに、その成果がレガシーとして会期後も社会に広がっていくことを目的とし、持続可能な取り組みに関する表彰を実施。

公式参加者については、博覧会国際事務局(BIE)と協議を行い、国際審査委員会が公式参加者褒賞の一部門として持続可能性表彰(Sustainability Awards)を設け表彰対象を決定することとした。10月12日のBIEデーにおいて、以下のとおり公式参加者に対して表彰が行われた。

【受賞者】

自己建築パビリオン タイプA(1,500m²以上):ドイツ連邦共和国

自己建築パビリオン タイプA(1,500m²未満):ルクセンブルク大公国

モジュールパビリオン(タイプB,X) : ヨルダン

シェアパビリオン(タイプC): 赤道ギニア共和国



持続可能性表彰 (出典 博覧会国際事務局(BIE)ウェブサイト)



持続可能な取り組みに関する表彰

同日、公式参加者以外の非公式参加者や営業参加者等による持続可能な取組に対して、博覧会協会から表彰を行った。受賞した各企業・団体からは、実施した取組について発表いただいた。

【受賞対象となった取組と受賞者】

脱炭素部門「万博会場内での脱炭素に関する取組」 5者

資源循環部門「万博会場内でのリデュース・リユースにかかる取組」 3者

(主にプラスチック、食品ロス削減の取組)

調達部門「調達コードに基づく物品やサービスの調達」 5者

(※持続可能性全般に関する基準(共通基準))



脱炭素部門	受賞者	取り組み概要・授賞理由
	大阪ガス株式会社	会場内の生ごみや大気中から回収されたCO2を原料にe-メタンを製造し、会場内の施設に供給。先進的な実証を分かりやすく展示し、カーボンニュートラル実現に期待を抱かせる内容であることが評価された。
	株式会社きんでん	パビリオン等にAIを活用したエネルギー管理サービスを導入するとともに、快適性評価値「工工きも値」の開発・実証を実施。会場内の省エネルギーに貢献したことなどが評価された。
	積水化学工業株式会社	万博会場のバスターミナルにペロブスカイト太陽電池を設置し、バス停の夜間照明に電気を供給。これから普及が期待される新規技術を多くの来場者が訪れる場所に大規模に設置したことが評価された。
	株式会社セブン-イレブン・ジャパン	会場内店舗において、水素発電や発電するガラスなどの最新技術を導入し、デジタルサイネージやインターネットで情報発信。こうした取り組みは脱炭素化への貢献が期待でき、全国展開の可能性を感じさせるものであり評価された。
	一般社団法人日本ガス協会	パビリオンにおける放射冷却膜材の活用や、主要構造物にリース材料を用いるなど、建物の運用から解体にわたって排出されるCO2を抑制する取り組み実施。このようにライフサイクルカーボンを抑えた建物を実現した点が評価された。

持続可能な取り組みに関する表彰



受賞者		取り組み概要・授賞理由
資源循環部門	株式会社アーバンリサーチ	会場内店舗における給水機の設置、什器の通常店舗での再利用、リサイクルTシャツの販売を実施。万博のレガシーと期待されるペットボトルの廃棄削減や、多くの什器を再利用する点が評価された。
	株式会社G-Place	会場の食品ロス削減に寄与するアプリ「万博タベスケ」の提供および運用を実施。食品廃棄物の削減効果が可視化できること、出品店舗、購入予約者共に無料で利用できることが特徴で、万博を契機にレガシーとして社会に広がることが期待され評価された。
	象印マホービン株式会社、株式会社中農製作所、株式会社スタッフ	会場内にボトルとキャップを約20秒で洗浄できるマイボトル洗浄機を開発し会場内に10台設置。マイボトルの一層の利用を促すものであり、評価された。

受賞者		取り組み概要・授賞理由
調達部門	大林組・大鉄工業・TSUCHIYA共同企業体	バイオ燃料の活用、労働環境改善に向けたDX技術の活用、福島県産材の大屋根リングへの活用など、調達コードの幅広い項目に高いレベルで取り組まれている点が評価された。
	株式会社鴻池組	バイオ燃料の活用、カーボンマイナスコンクリート二次製品の開発・採用などの実験的な取組を企業全体で熱意をもって推進している姿勢が評価された。
	株式会社セブン-イレブン・ジャパン	プラントベースフードの提供、包装材のバイオプラ化など、環境分野に特化して総合的に取り組み、インパクトを可視化している点が評価された。
	大成建設株式会社	日本の伝統的な建材である茅を、産地と連携して、再利用を見越した葺き方でパビリオンの屋根材料としてつくりあげ、茅材のサステナブルな魅力を伝えたことが評価された。
	株式会社FOOD & LIFE COMPANIES	人権面など総合力を高めながら、養殖の技術開発を通じて、天然資源によらない水産物のみを使用する寿司業界のロールモデルを示したことが評価された。